

藍澤南城の三餘堂

中國學專攻博士課程後期課程二年 村山敬三

はじめに

儒者藍澤南城（一七九二—一八六〇）は、文政二年に江戸遊學から郷里の越後國刈羽郡北條村南條みなみじょうに歸って、翌年學塾三餘堂を開き、その後は萬延元年に六十九歳で世を去るまで子弟の教育を續けた。新潟縣立圖書館、柏崎市立圖書館には藍澤南城に關する資料が收められており、柏崎市立圖書館においては『學塾三餘堂關係資料』がまとめられている。三餘堂についてのまとまった解説としては、既に『新潟縣史 通史編5 近世3』（以下『縣史』と略稱）、『柏崎市史』（中卷）（以下『市史』と略稱）、内山知也著『藍澤南城—詩と人生—』などがある。しかし、三餘堂の資料は限られており、まだ三餘堂に關して説明すべき點は多く残っている。

筆者はかつて郷里の新潟縣柏崎市で藍澤南城研究會（宮川久子氏主宰・内山知也先生講師）に所屬していた。研究會では時に研修旅行をしたり、またその下見をしたりすることがあったが、その過程で三餘堂について新しく資料を得たり、三餘堂入門者の年齢を知ることもあった。また、筆者の友人でもある福原國郎氏のご先祖が三餘堂に入門しており、家にあった古文書類を整理していて南城の手紙を發見している。氏の報告と考察は「南城先生の手紙と無名の弟子たち」

藍澤南城關係資料斷簡拾遺⁽⁶⁾」(以下「南城先生の手紙」と略稱)して發表されている。

そこで、筆者は既存の資料に加えて藍澤南城研究會の活動や福原氏の論考などを踏まえながら、三餘堂に關するいくつかの事柄について考えてみた。以下にそれを報告したい。なお、三餘堂は南城、朴齋、雲岫⁽⁷⁾と三代續いた學塾であるが、本稿で扱うのは南城の時代についてのみである。

一 三餘堂の場所・入門者數・入門時の年齢・學費

(一) 三餘堂の場所

三餘堂が建てられた場所は越後の國刈羽村南條(現新潟縣柏崎市南條)である。ここは南城の郷里ではあるが、市街地からは十キロほど離れた農村地域で、三餘堂は八石山⁽⁸⁾の麓、平地よりはやや小高い場所にあった。そこで、南城は自分の住まい、つまり三餘堂を常に「山中」と表現している。三餘堂には寄宿舎もあった。そこで、地元の人たちは三餘堂のことを「リョウ」と呼んでいたらしく、この呼稱は最近まで残っていた。自分の郷里ではあるが、なぜ南城はとさら交通不便で塾生を集めにくいこの地に塾を開いたのであるか。考えられる第一の理由は、塾生にとって好ましい環境を求めたということである。遊び場所が多くある町中よりも農村地域の方が學習に集中できるからである。第二の理由は、この地域が南城の思想に合致していたということである。南城は「尊農篇」(『三餘集』卷七)の作などがあるように農業を重視している。また、三餘堂の名の由來にも農業従事者を塾生として考えていることが現れている。第三の理由は廣い敷地が確保できるからである。三餘堂は「樓屋宏壯。東西五間。南北十五間。優に百人を容るべし⁽⁹⁾」⁽¹⁰⁾と言われる大きな塾であったが、そればかりではなく千坪に及ぶという庭園⁽¹¹⁾があった。南城はここに居を構えるにあたっ

て、こうした構想を當初から持っていたのであろう。

(二) 入門者數と入門時の年齢

三餘堂の南城時代における入門者は、『三餘堂弟子籍』(新潟縣立圖書館藏)によって數えてみると述べ數で七百二十九人であるが、その中で名前が重複して記載されている者が三名いると見られるので、實質の入門者は七百二十六人である。『北越詩話』に「及門前後二千餘人」とあるが、南城自身も「門館に入る者、三年小成以上、幾んど千人。倏來忽去の者を并せ數ふれば、將に二千人ならんとす」と述べている。ここに「三年小成以上」とある。『三餘弟子籍』に記録された入門者は、三年以上の入門期間を目安に本格的な學習を目指して入門した人たちだったのであろう。

入塾時の年齢についてまとめた資料はなく、筆者が知り得たものも少ないが以下にそれらを記す。數え年を一應の基準とする。(一) 内は、入門の時期と出身地である。

- ・村山保之丞(天保四年・岡の町) 十三歳で入塾(一八二二年生まれ)
- ・内山子常(入門時不明)「年十七八三餘堂に入る」『北越詩話』下、四九六頁
- ・村山如璋(入門時不明)「年甫め十三。藍澤南城の三餘堂に學び。…」『北越詩話』下、四九九頁
- ・福原文平(天保十四・眞人)「數え年十歳で入塾」『南城先生の手紙』による
- ・福原俊太(嘉永五・眞人)「十四歳で三餘堂入塾」『南城先生の手紙』による
- ・福原平内(安政三・眞人)「十三歳での入塾」『南城先生の手紙』による
- ・山崎右助(天保八・小國朴坂)「十九才で藍澤三餘堂に入門」『法坂のあゆみ』による
- ・榮鳳(天保四・小泊) 十六歳で入塾(南城研究會での調査による)
- ・佐藤和三郎(天保十・頸城) 十三歳で入塾(南城研究會での調査による)

・淨琳寺 利法（文政十・高田新町）二十歳で入塾（南城研究會での調査による）

・淨琳寺 林海（嘉永二・高田新町）十八歳で入塾（南城研究會での調査による）

・竹村屯（安政二・熊ノ森）十六歳で入塾（一八四〇年生まれ）

・飯塚直吉（安政四・新道）十四歳で入塾（一八四四年生まれ）

・入澤健藏（文政四・西野）十四歳で入塾（「入澤恭平先生年譜」に基づく）

この中での最年少は「十歳」、最高齢は「二十歳」でかなり年齢差はあるが、多くは十四歳前後での入門である。これによって三餘堂のおよその状況を推測できる。越後の二大私塾と言われるもう一つの私塾に、儒者鈴木文臺（一七九六〜一八七〇）が開いた長善館があるが、長善館の門人帳には年齢が記載しており、池田雅則氏によれば、分析対象一四一人の平均は一五・一歳である⁶⁶。なお、福原氏の「南城先生の手紙」によれば、文平は少なくとも九年は在塾、俊太は「六年間十九歳までの在塾」、平内は少なくとも五年以上の在塾と考えられる。

(三) 三餘堂の學費

福原氏は「南城先生の手紙」の中で三餘堂の學費について述べている。氏は家に保存されてあった大福帳を調査し、南城に關係する部分をすべて抜き出し考察を加えている。福原家は中魚沼郡眞人村（現小千谷市）の庄屋であり、三人の子弟が三餘堂に入門している。福原氏の調査から、年ごとの支出合計の部分だけをまとめて示すと以下のようになる。なお、（ ）内は筆者が福原氏の記述を踏まえて補足したものである。

○嘉永四年（1人在塾）（支出見當たらず）

○嘉永五年（2人在塾？） 一兩一分八二〇文

○嘉永六年（1人在塾） 六兩二分二朱二〇〇文

○安政元年（1人在塾） 五兩六〇〇文（石碑御禮壹分を含む）

○安政二年（1人在塾） （支出見當たらず）

○安政三年（2人在塾） 一兩三分

○安政四年（2人在塾？） 二兩二朱二八〇文

○安政五年（1人在塾） 二朱

○安政六年（1人在塾） 一分二百文

○萬延元年（1人在塾） 一兩二分二朱

この調査結果について福原氏は、①「しんざい薩代・御坐代」として見えるものは寄宿費と思われるが、それは「二、三朱」で一定している。②年ごとの差が大きく、少ない年は書き落しがあるかもしれない、③嘉永六年の約「六兩半」（授業料教材費・寮費）は現在に換算して約「百九十五萬」である、④大福帳には、餘分に支拂った金が二年後に全て費用に使われたこと、また不足金を翌年に拂ったことを表していると思われる記述もあるが、年ごとの支出の差の詳細は不明で書き落しがあると考えておくほかない、などの點を述べている。

海原徹著『近世私塾の研究』には私塾の束脩（入學金）、謝儀（授業料）について解説がある¹⁵⁹。それによれば、多くの私塾の束脩に定額はなく、慣習的に金品を納めた、暮末期の大規模な塾には束脩の納入がルール化されたものもある、平均的な束脩は金百疋でいど、謝儀も定額はなく、盆、暮の年二回がふつうで、年賀や暑中見舞いなども含め、年に數回という場合もあった、原則として品物で納め、次第に現金化していった、咸宜園では盆、暮れの二回、大體金一〇〇疋を納めたが、これも定額ではない、松下村塾では授業料はなく、寄宿生から實費を集めた、菅茶山の廉塾では豫め教師の許へいくばくかの金を預けておき、盆、暮に收支決算した。大要以上のような説明である。

福原氏の論考には支拂いの日付まで示されているが、その中では確かに十二月の支出が多い（25回中7回）。だが、その金額もかなり幅がある。不明な點はやはり多く残るが、海原氏の解説から當時の學費の支拂い方の狀況は、現代の感覺と全く異なっているのだということが分かる。したがって、福原氏の調査で年ごとの支出の差が大きいことはある程度うなずける點もある。いづれにせよ、福原氏の報告は史料に基づいて初めて三餘堂の學費について調べた有意義なものであり、今後同種の史料が出てくることが望まれる。

二 入門者の多かつたこと背景

(一) 社會的背景

三餘堂と並ぶ二大私塾の一つ、長善館は粟生津村（現新潟縣燕市）にあった。長善館も蒲原平野の穀倉地帯に建てられているが、粟生津に比べて三餘堂のある南條は、冬には大雪の積もる交通不便な地域である。そのような三餘堂になぜこれだけの入門者が集まったのであろうか。阪口五峰は南城について次のように述べている。

余越人の詩を採る數百家。其の師授の出づる所を見て。而して後に南城の教育に於ける。其功の大にして其澤の廣きを知る。蓋し郷先生、善誘を以て稱せらるるもの。世、其人に乏しからず雖も。青衿の就きて業を問ふ者は。大抵、方十里の外に出でず。而して南城門下の籍を査すれば。則ち刈羽・魚沼・古志・三島・蒲原諸郡に涉り。其の遠きものは。二三十里の外に及べり。憶ふに、文運草昧の時に當り、南城夙に聲名を得しに因ると雖も。抑々亦た學術操行の時流に卓拔するに非ざるよりは孰か能く之を致すを得むや。

五峰はこのように三餘堂の入門者が廣範圍に及んでいることを説明している。五峰はその理由を、南城が早くから名

を知られていた人物であり、さらに當時において拔群の學力をも身につけていたからだと考えている。内山知也氏も、

南城の門人は刈羽・頸城・古志・三島・蒲原・魚沼の各郡等の各地に廣くわたっており、寺院出身もまた多い。入塾希望者がこんなにも擴大したのは學塾の寄宿舎が完備したことにもよろうが、南城の學識人格が知れわたったことにもよろう。學塾が農村に開設され武家の政治社會や町人の世界から隔離されていたことは、農村豪農の父兄に一種の安心感を與えたのではなからうか。

①② と言ふ。内山氏も寄宿舎の設備や豪農の父兄の心情を補足して述べているが、やはり南城の學識人格を擧げている。しかし、長善館の鈴木文臺は特定の師に就かず、「ほとんど獨學で、優れた考證學者になった」^②という人物であり、南城ほど名は知られていなかったと思われるが、長善館にも多くの入門者が集まっている。

伊東多三郎氏は、越後の私塾の開設の狀況について次のように述べている。^③

開設年代は地方の産業經濟の發達が盛んであった田沼時代から文化文政時代に及ぶ六十年餘の間に三六塾、幕藩體制の衰亡期に當る天保以降、王政復古の成就、新政策の實施期に及ぶ四十年餘の間に八二塾である。この趨勢は、藩學が田沼時代から増勢をたどり、庶民教育のための郷學が文化文政時代から幕末維新期にかけて増加した全國的趨勢とほぼ歩調を共にせるものである。

これによれば、「地方の産業經濟の發達」に伴って「庶民教育のための郷學」が増加したと考えられる。江戸期には早くから藩校が存在し、武士は必然のこととして漢學を學んできたが、確かに經濟的な安定が進んでくると、武士以外、特に生活にゆとりを持つ富裕な家では子弟に學力をつけさせたいと思つたはずである。彼らは多くの人を使う立場に立ち、また地域の指導者として知識教養を身につける必要もあつた。『市史』では、柏崎に漢詩文による文化が起つたのは十八世紀の末ごろからだとした上で、その社會的經濟的背景を次のように述べている。^④

このころ、もっぱら文字教養を必要とする醫師、僧侶たちが、自分の子弟に教養をつける必要性に迫られてきた。というのは、幕府の教育振興政策の強化によって諸藩の藩校が急速に新設される状況になり、多くの教師（主として儒者）が必要になったため、庶民階級にも武士になれる可能性が生じたこと、商業の發達によって江戸・京都・大阪へと商人が往來し、文化受容が急速に進み、寺子屋程度の學力では時勢に追いつけなくなってきたこと、などの社會的事情が生まれたからである。

たとえば、「農」の出身であっても仕官して藩儒となれば身分は武士である。私塾で學ぶ者の多くがそれを目指していた。たとえ仕官を目指さないとしても、當時地方においても學問の必要性が増してきて、交通不便な遠隔地でも、またそれほど知名度のない人物であっても私塾に人は集まる社會的基盤があったと考える必要がある。福原氏の「南城先生の手紙」には「安處道人碑」（『三餘集』卷十三）にまつわる話が記されている。この碑がある場所は現小千谷市眞人町の栃若という集落である。安處道人は代々農家であったが、三十代で足を悪くしたため農業に従事できなくなり、書を學び師となって地元への教育に貢獻した。福原氏は「道人のもとには近郷の小千谷を始め、十日町、川西、小國、柏崎からも門人が集まったという。現代の常識では生徒が集まるとはとても考えられない便の悪い所であるが、歩くことしかなかった當時は山の中も町の中も同じだった。」と言う。道人には、今では消失してしまったが「百人以上の名を連ねた道人の門人帳」があったというのである。おそらくこうした學びの状況は、越後のみならず當時日本の各地で見られたことなのであろう。

(二) 僧侶の入門者について

さて、いったい南城自身は塾の入門者集めにどの程度のことをしたのであろう。それとも自身の評判だけで人は集まってきたのだろうか。三餘堂に入門者が多く集まったことの背景を、さらに入門者の實態を通して考えてみたい。

今入門者についてその内譯を検討してみると、寺院の子弟が多く入門していることにまず気がつく。『三餘堂弟子籍』を見ると、僧侶の子弟は名前の前に寺院の名前も記されており、人名にも「釋」「僧」と書かれていたりするので、區別が容易である。数えてみると入門者の全體に占める割合は三十%である。『縣史』では言う。

越後の私塾は一般に折衷學的傾向が強く、藍澤南城にみられるように、佛教にも關心をもっていたから、僧侶も學びやすかったのである。⁽²³⁾

確かに長善館でも「折衷學的方法によって典籍の嚴密な理解に到達しようとする教育が展開された」⁽²⁵⁾のである。三餘堂については、『縣史』では南城の學問觀を示しながらとして次のように述べている。

南城の教育姿勢にかかわって留意すべき點は……中略……儒教・佛教・神道の「殊途同歸」論、すなわちそれらをいづれも聖道から生じ、眞理を述べるものとする祖師片山兼山流の學問觀である。そこから黨派的儒學教理を嚴密に相對化し、老莊思想さえも積極的に取り込もうとする獨特の姿が立ち現れてくる。これが、僧侶の入門者が相次いだ理由の一端であろう。

また、川村肇氏も南城が「儒學を超えて、佛教や神道までをもその學問の範圍に收めたことの影響があるのではなからうか。」⁽²⁶⁾と言う。ただ川村氏の見解は「儒學を超えて」と言い、南城の主張の重點が儒學・佛教・神道の「三教一歸」にあったという見解で、南城の學問のとらえ方自體に疑問が残る。⁽²⁸⁾三餘堂における僧侶入門の主要な原因を南城の學問だけに求めて他の塾との比較検討の觀點も不足している。それに對して、『縣史』は「僧侶の入門者が相次いだ理由の一端」(傍點筆者)と言っている。三餘堂に僧侶の子弟が多く入門したことのほかの理由を、三餘堂の入門者の實態を通して考えてみたい。

『縣史』では、三餘堂と長善館について僧侶の子弟の入門者數が説明されている。それによれば全入門者に占める僧

侶の割合は三餘堂では28%で、長善館では17%になり、宗派別では、眞宗の割合が三餘堂では72%、長善館では45%になる。つまり、三餘堂は僧侶の割合も高いが、眞宗の割合はさらに高いのである。『縣史』は、眞宗の僧侶が多いことについては、寺院の數そのものが多いことと、「住職が世襲だったため、地元の塾で學ぶ機會が多かったせいであろう。」⁽³⁷⁾ と言う。この「世襲」という點についてもう少し詳しく考えてみたい。

森岡清美氏は、眞宗寺院の特色について「もろもろの地方差を貫いて現われる最も強烈な特色は、蓋し住職の地位が世襲相續されるという一點に存すると思われる。」⁽³⁸⁾ と言ひ、例外的な現象をのぞき、「一宗をあげて子孫相續によつたのはひとり眞宗のみの特殊な慣習であつた。」⁽³⁹⁾ と言ふ。それならば、眞宗寺院では子弟が寺を繼ぐと決まっているわけであるから安心して早い時期から子弟を私塾に入れることができることになる。だが、それにしても長善館に比べて三餘堂において特に眞宗の割合が高いのはなぜであろう。

近世最大の漢學塾といわれる咸宜園でも眞宗が多かつた。井上義巳氏によれば、入門者の合計、四一二人のうち僧侶は一三九三名(33・8%)、また、僧侶の三分の二は眞宗、その残りの半分を淨土宗、そして禪宗が續くと言ふ⁽⁴⁰⁾。川邊雄大氏は「なぜ淨土宗徒である淡窓の主宰する咸宜園に、多くの眞宗僧が多數學ぶようになったのかについては、淡窓が受けた教育によるところが大きい。」⁽⁴¹⁾ と言ひ、淡窓が東本願寺の僧侶から學問を習う機會が多く、最初に私塾を開いた場所も東本願寺の寺であつて、東本願寺の人脈による入塾方法が存在したと思われる⁽⁴²⁾ と言ふ。三餘堂においても、これに似たような人脈が存在したのではなからうか。

眞宗においては、組と呼ばれる組織が存在し、それはすでに近世史料に現れるという⁽⁴³⁾。「組には組の會議とか協力布教とか、組全體の協力活動もあるが、組内の特定寺院を中心として結集される協力もあり、個々の寺院にとつては何よりもこれが重要なのである。」⁽⁴⁴⁾ とされる。三餘堂においては眞宗の中でも71%を大谷派が占めている⁽⁴⁵⁾。そこで、新瀉縣

の、特に大谷派の實態について調べてみると、大谷派は三條教區と高田教區とに分類され、さらにそれぞれが組のグループに分かれている。現在、柏崎刈羽の地域は三條教區の第十組きにまとめられている。現在とは多少の變化はあるにせよ、江戸後期においてもこのような眞宗間のネットワークは存在したはずであり、そうした場で三餘堂が話題になったことは充分に考えられることである。

南城と眞宗、特に大谷派との關連を探ってみると、加納村にあった光賢寺こうげんじとの結びつきが強くあったことが知られる。加納村は三餘堂のある南條とは鯖石川さばいしを挟んだ對岸にあり、南城の父北溟の出身地でもある。歴史をたどると、儒者寺澤石城(一七二八—一八〇二)が學塾踰館こくかんをこの光賢寺邊りで開き、南城の父北溟はここで石城から漢學を學んだのである。そして、三餘堂の開塾當初、南城はこの光賢寺で弟子を教えた可能性もある。南城が江戸遊學から歸ってきた時、既に北溟に先立たれていた南城の母班はんは南條の實家に戻っていたから、その實家で南城はまず弟子たちを教えたと考えられるが、少數ではない入門者を教えられる場所を確保するには苦勞があったはずである。いずれにしても、光賢寺は南城にとってゆかりの深い所であった。三餘堂には光賢寺から三人が入門している。おそらく當時の光賢寺の住職も南城に對して好意的であつたであろう。したがって、南城の塾生集めに際しては、光賢寺を起點にした眞宗大谷派の寺院のつながりが關係していると考えられる。

(三) 一戸からの複数入門者がいること

『三餘堂弟子籍』に記載された弟子を地域別にまとめ直してみると、入門の時期は違っているが、一つの寺院、家から何人もの入門者がいる例が多いことが分かる。例えば、柏崎中濱の勝願寺からは長男から四男まで四人が入門している。これら複数の入門者がいる例について統計をとってみると、その延べ人数は一六〇人であり、家ごとに数えると六二戸である。その六二戸の内譯はやはり寺院が多いが庄屋などの地域の有力者もかなり含まれる。もしも、三餘堂の入

門者を延べ人数ではなく、一戸ごとの入門として数えた場合には、七二九人の入門が六三二戸からの入門となる。『三餘堂弟子籍』には同姓の者が非常に多く見られ、おそらくその中にまだ筆者の統計に入らなかった家族関係を持つ者がいると見られる。我々は通常入門者の数を聞いた場合、この事例のほどには一戸から多くの入門者がいることを想像しない。兄弟で入門者がいることは想定しつつも七二九人の入門者を漠然と個別なものとしてとらえ、塾の規模の大小を思ふのである。

以上のことから了解されるのは、入門者それぞれが個別に三餘堂を選んでいくわけではなく、家ごとまた職業的なまとまりがあつて入門している例が少なからずあるということである。また、三餘堂の「三餘」には農事が忙しくても餘暇を利用して學問はできるとの意味が込められているが、實態としては、時間的經濟的なゆとりを持つ富裕な層が三餘堂の大きなウエイトを占めていたということも感じられる。したがって、郷村における庶民教育の高まりという場合、それがどの程度僧侶や庄屋など富裕な家々に集中して見られるのかを見定める必要があるであろう。同時に、各地域の有力者がどのような教育意識をもって子弟を入門させているのかも考える視點も必要だと感じられる。この點に關連して興味深い事例がある。三餘堂の入門者の中に、長善館がある粟生津から四人の入門者がある。地元にある長善館ではなく、ことさら遠隔の三餘堂に入門しているのはなぜなのか。塾主の南城の學識人徳を慕つてのことという見方もできるが、それとは逆に柏崎から長善館に入門している事例もある。そうしてみると、どの塾に子弟を入門させるかという選擇の基準は、必ずしも塾主の人物性だけでなく他の要素もあつたと考えられる。その一つとしては、當時の庄屋や寺院などでは、ことさら子弟を遠い地域に出して教育させようという意識があつたと考えられよう。

三 「南城三餘堂 塾式」

藩校でも私塾でも學則がある。三餘堂でも當然學則の類があつたはずであるが、これまでその史料は残っていないか⁽⁹⁾つた。以下に示す「塾式」は新しい史料で、三餘堂の入門者が三餘堂（南城）から與えられたものようである。⁽¹⁰⁾

南城三餘堂 塾式

- 一 國政之得失を不可議
 - 一 異端之徒を不可批
 - 一 時儒の長短を較
 - 一 先進後進不相犯
 - 一 猥褻鄙俚を不可語
 - 一 客來時不可失送迎之禮
 - 一 衣食玩笑心ニ不可奢
- 文政三辰歲夏五月定
- 一 食臨之放飯流噉し或は猥談誼語すへからず
 - 一 道路農作を不可害 竹木を不可折

文政四巳歲秋八月補

右之條々朝夕服膺すへし學之道徒ニ講經屬辨而已ならず修身行禮を要務とす朋友相親之宜く忠告善導すべし

教授書課

合刻四書 論語 孟子 易 詩 書 周 儀 禮 古詩聯珠 文選 蒙求 十八史略 元明史略

右素讀

說苑 新序 家語 蒙求 世說 顏子 孔叢 大載 晏子 韓詩 賈子 韓子 呂覽 淮南 管子 墨子 列子
莊子 老子 七書 荀子 孟子 孝經 大學 中庸 論語 詩經 書經 周易 三禮 春秋 三傳 示雅 國語
國策 史記 前後漢書 三國志

右會業

初學讀書必先熟談子傳然後及于經儀略明然後及于歷史ニ歴史浩瀚未可遑涉獵也必讀至于三國志則其他談史之易讀猶
刃破竹也是予家之設課所以止于三國志也^⑧

文政萬之載

三餘堂

この中で「教授書課」から「右會業」までの箇所は楷書體で書いてあるが、その前後は南城の筆跡としてよく見られる崩し字の連綿體で書かれている。「周」「儀」「禮」とあるのは、言うまでもなく周禮、儀禮、禮記である。「文政三辰歲夏五月定」「文政四巳歲秋八月補」とあり、全くこれは三餘堂開塾當初のものである。「教授書課」における「素讀」と「會業」の學習方法は、多くの藩校や私塾で行われていたものである。「合刻四書」は片山兼山が定めた四書のこと、孝經・學記・大學・中庸を指している。

この「塾式」はまだ開塾當初であつたせい、かなり簡素なものであり、學習そのものことよりも生活規範に關係したものが多し。あるいは「塾式」という名前になっているのは、學習規範に關するものは別にあつたからなのかもしれない。その中で「國政の得失を議すべからず」には社會的な行動が全く見られなかつた南城の主張が反映されている

ようである。「時儒の長短を較せ」は折衷派の考え方が背景にある。經書の解釋などにおいて自分の立場を一家一學派に特定せず、各説の長短を知って自説に取り入れようとする考え方である。「道路農作を害すべからず 竹木を折るべからず」は、學則の例としては珍しい。農村地域での開塾という點を意識したのであろうが、單に周圍が農村であるからというだけではなく、南城の農業重視の思想が現れているようである。「學の道徒いたづらに講經屬辨のみならず修身けいしん行禮を要務とす」としているのは、儒教道徳を教える私塾として一般的なのであろうが、塾生が年少であることや子弟の教育に關する保護者の心情に配慮している面もあると考えられる。

四 三餘堂の經營

本山幸一氏はその論考で、安政六年の柏崎におけるコロリ病の大流行に觸れ、飯塚彌兵衛の書狀にハシカの流行が記されていて、そのコロリ病の大流行と同じ時期のものらしいと言ひ、同時に三餘堂についても述べている。その書狀には

「麻疹者御地如何ニ御座候哉、此地ハ銘々各々病人有之兎角跡長ク重き方ニ御座候、私小兒共不殘相濟大きに達者ニ相成悦入候」「學士傳貳冊、水府公三冊、是ハ直吉より之分差上申候、南條より毛利候御系譜差上申候、御落手可被下候、南條ニ而も益前一時二十三四人塾士不殘はしかニ而大混雜、古先生之女子壹人右之病ニ而遠行之由」

とあり、十三四人の塾生全員がハシカになってしまったことが分かる。本山氏は「三餘堂の混亂ぶりがうかがわれる。」と述べている。書狀中の「(飯塚)直吉」は安政四年の入門である。通常三年は學ぶとして、安政六年にはまだ在塾中である。直吉が三餘堂での見聞を傳えているのが安政六年であることと合致する。「古先生」とは南城であろう。跡繼

ぎがいなかった南城は娘佐知の婿として養子に朴齋を迎えていた。「古先生」とは、朴齋と區別した言い方なのだと考えられる⁽²⁾。安政六年は南城六十八歳、没年の一年前である。

さて、このような塾生が全員ハシカになってしまふという事態はそうたびたびあることではないが、三餘堂では毎年平均十七人ほどの入門者がいたわけで、特に寮生活を送っている塾生については、生活規律から毎日の食事などその面倒をみるのには苦勞が多かったであろう。『三餘集』からは在塾中に死去した者がいたことも知られる⁽³⁾。南城はまた、塾を終えた弟子のその後についてもつながりを持ち、親から相談を受けることもあった。福原氏の「南城先生の手紙」には、門人の縁談について南城が福原家に宛てた手紙が紹介されている。原文も示されているが、ここでは福原氏の書き下しだけをそのまま引用する。

御紙面拜誦。大暑御障りなく御揃いなられ、大慶に存じ奉り候⁽⁴⁾。文平子、内々相い正し候処、格別深き訳ながらも之なき様子に付、縁談は両親並び親類衆の相談にまかせ申すべき様の口書、相認めさし上げさせ候。委細御使の御仁より申し上ぐべく候。在館勘定、別紙学頭より差し上ぐべく候間、盆後にて宜敷く候。右御報旁がた、斯くのごとくに御坐候。不備。

福原氏は「南城は授業をするだけではなく、少年たちの生活の世話全般をしなければならなかった。親の縁組みの意向を仲介するようなこともしたということである。」と述べている。ただ、ここに「學頭より」とあるように事務一般を執り行う係の人物がいたことが確認されるから南城自身は煩雜な雑務は行わず、平常は泰然と構えていたのであろう。また、南城は地域において相當の尊敬を集めていたと思われ、門人の保護者から三餘堂にはいろいろなものが届けられたようである。次に示すものは、南城が女谷地域の布施庄兵衛に出した書翰(返信)である。布施氏からは文政七年に「布施米藏」が三餘堂に入門している。

御書翰拜誦愈時候

無御障被成御坐大慶

奉存候 次ニ當境無事

罷過候

瀧石先年御惠投之分

小假山ニは不足ニ候閒盪盤

之下ニ相用樂ミ居候處

此度御繁多之御中ニ而

御取集メ態々人馬ヲ以

御送り被下御深情忝

奉存候大小共十四石拜受

仕候

文選備忘被迎遣學頭ニ

問合候處人ニ遣候よしニ而

手許ニ無之外之□生共相

認メ候分ニ卷さし上候

庄之字ハ莊之俗字ニ御坐候

ヤシキト訓シ申候古ハ莊官莊田

シャウヤ

杯と唱候より何之莊と申事も相

始り申候

何もさし上候品無之□

扉ニ懸御目申上候 尙可

期後音萬諸可申

承候 不備

閏月四日

これによれば、南城は布施庄兵衛から「珍敷孟宗」や「瀧石」をもらっていることが分かる。その他頼まれた文選を手許にあった二巻をとりあえず與えていることや問われていたらしい、「庄」と「莊」の違いについて教えている。南城と門人の家との交流の様子が感じられる。「瀧石」は女谷地域に産する珍しい石であるが、石とは言っても「大なるものは圍み尺餘、長さ八九寸^⑮」である。南城はこの石を愛好し、庭石にするにはまだ足りないと言っていたところ、布施氏は「人馬を以て」「大小共十四石^⑯」を運んでくれたと言う。これを運ぶのは容易ではなく、南城への敬意がなくてはできないことである。

さて、塾の経営にはなんといっても資金の問題がつきまとう。當然それは塾生の束脩、謝儀からまかなわれたはずであるが、南城は潤筆料として得たものも塾の運営に役立てていたと考えられる。南城はしばしば自分の詩文を書いて門人やその家、また近隣の人々に與えていたようである。「南城先生の手紙」によれば、南城の「安處道人碑」の潤筆料が「一分、約七萬圓」である。庄屋であった福原家が地域の依頼を受けて南城に碑文を書いてもらう仲介をしたらしい。

『三餘集』には南城が門人やその家に與えた詩文が数多く見られる。「記」には堂號を命名したもの、書齋について記

したもの、地域の珍しい産物について書いたもの、その家の歴史について書いたものなどがあり、その他一族の系譜について記した「譜」、書畫集や長壽の祝いの「序」、また墓碑、傳記の類も何編かある。これら散文のほか、南城が書いた絶句律詩などの書幅は地域に数多く存在していると思われるが、これらはほとんどが潤筆料があつて、南城はそれを塾の運営維持管理に役立てていたものと考えられる。

おわりに

紙數に限りがあるので、今回の報告は以上に止めたい。本稿では、筆者があらたに知り得た資料を中心に三餘堂の實態を考えてみた。今回、資料として特に有益だと感じたのは南城の手紙である。地域にはまだ知られていない南城の手紙など古文書の類が多く存在しているように感じられる。そうした新たな史料が発見されれば、少しずつ三餘堂の教育の實態が解明されていくことであろう。それにしても、交通手段としては歩くことが主要な方法であつた時代に、年少の子弟を三年以上、場合によっては十年近く、遠隔の地に送り出す保護者の心情はどのようなものだったのであろう。彼らは強制されたわけではないのに、教育のためとはいえまだ幼さの残る子弟を家庭の中において育てることをしなかつたのである。そのような江戸期の教育の實情を知るとは、現代の我々に何かしらの示唆をもたらすように思われる。

注

(1) 『新潟縣史 通史編5近世3』(五七〇頁)による。

- (2) 正確には『新潟縣指定有形文化財指定記念 藍澤南城展解説目録 學塾三餘堂關係資料』。平成十年發行、柏崎市立圖書館編。
- (3) 昭和六十三年發行。
- (4) 平成二年發行。
- (5) 東洋書院、一九九四年發行。
- (6) 『北方文學』第五十五號、玄文社、二〇〇四年發行。
- (7) 標高一八メートル。
- (8) 南城は、最初に母の實家である南條村の關家で三餘堂を開いたものと考えられるが、四十一歳のころ八石山の麓に三餘堂を新築したと考えられる。
- (9) 「三餘」の出典は、『三國志』魏書「王肅傳」注に引かれた「魏略」で、明帝の時、董遇の話として「人有從學者、遇不肯教、而云必當先讀百遍。言讀書百遍而義自見。從學者云、苦渴無日。遇言當以三餘。或問三餘之意、遇言冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘也。由是諸生少從遇學、無傳其朱墨者。」とある。つまり三餘堂の「三餘」とは、年の餘り(冬)、日の餘り(夜)、時の餘り(雨)を意味し、その命名には學問する時間を持たない農村の人々を意識したことが感じられる。
- (10) 『北越詩話』上巻、七六四頁。『北越詩話』は大正八年刊行で、その復刻版(平成二年發行)による。著者は阪口五峰で、越後の詩人の略傳と漢詩を載せている。
- (11) 藍澤家に傳わる『藍澤三代記』に「庭園は千坪に及び、築山を背にして松杉竹林に圍まれ、築山には、小瀑布がかかり、その流れを池に導くようになっている「築山泉水庭園」で、庭全體に多數の石組飛石を配す」などと書かれている。
- (12) 『市史』では七百七人となっている(六三六頁)。
- (13) 『北越詩話』上巻、七六四頁。『北越詩話』については注(10)を参照。
- (14) 『論語私説』卷三に「入于門館者、三年小成以上、幾千人。并數條來忽去者、將二千人。」とある。『論語私説』は南城六十歳ころの成立かと思われる。
- (15) 平成十二年發行、「法坂のあゆみ」編集委員會編(刈羽郡小國町)
- (16) 『私塾の近代 越後・長善館と民の近代教育の原風景』池田雅則著(東京大學出版會・二〇一四年發行)その一七二頁。
- (17) 思文閣出版、一九八三年發行。その四〇頁「學校財政」。
- (18) 『北越詩話』上巻、七六三〜七六四頁。『北越詩話』については注(10)を参照。

- (19) 内山氏、前掲書九二頁。
- (20) 『縣史』五七一頁。
- (21) 『近世史の研究』(第三冊) 吉川弘文館、昭和五十八年發行。その「越後の私塾」二九四頁。
- (22) 『第五章 漢文學の展開』五〇四頁。執筆は内山知也氏である。
- (23) 川村肇氏は二七・六%とする。『幕末維新期漢學塾の研究』(溪水社、平成一五年發行)「第三章 在村知識人の學問と私塾―新潟縣柏崎、藍澤南城の事例―」その四九五頁。
- (24) 『縣史』六四六頁。
- (25) 『縣史』五三六頁。
- (26) 川村肇氏前掲書、四九六頁。
- (27) 川村肇氏前掲書、四八四頁。
- (28) これについては紙数を要する問題なので別稿として考えてみたい。
- (29) 「眞宗教團と『家』制度」(創文社、昭和三七年發行)、その一四頁。
- (30) 『廣瀬淡窓』(吉川弘文館、昭和六十二年發行)二一七―二二八頁。
- (31) 『東本願寺中國布教の研究』(研文出版、二〇一三年發行)四一、四二頁。
- (32) 森岡清美氏前掲書、二四一頁。
- (33) 森岡清美氏前掲書、二五三頁。
- (34) 大谷派が一三五名、本願寺派が一三名、佛光寺派が九名である。
- (35) 現在寺澤石城の墓碑が光賢寺境内に建てられていて、『市史』五〇四頁「第五章 漢文學の展開」に詳しい。
- (36) 『長善館學塾史料下』の「門人姓名簿」には「柏崎管内」と記された門人が九人いる。
- (37) 柏崎市立圖書館には「南城村 南城義塾々々則 附遺稿」が存在する。これは南城を塾主として「安政元年」の事實として書かれているようであるが、この資料は明治十三年の沿革まで記載されていることから、それ以後の調査によるものである。これによると、「教師ノ數」は「男 五」、「生徒の概數」は「男 六十名」、「學習年限」の項では「凡拾箇年」、「束脩謝儀」の項では「束脩隨意 謝儀一カ年 金四百疋」などとなっている。ただ、以上のような記載の中には安政以降のことが混在している感もある。

- (38) これは、藍澤南城研究會の研修旅行の際、三餘堂入門の高頭家のご子孫のお宅を訪問した際に見せて頂いたものである。
- (39) 初學の讀書必ず先づ子傳に熟談し、然る後經儀に及び、略明らかなれば、然る後歴史に及ぶ。歴史は浩瀚なれば未だ遠く涉獵すべからざるなり。必ず讀むこと三國志に至れば、則ち其の他の談史の讀み易きこと猶ほ刃竹を破るがごときなり。是れ予の家の課を設くること三國志に止まる所以なり。
- (40) 『柏崎刈羽』第32號（平成十七年發行・柏崎刈羽郷土史研究會）「幕末期情報傳達の一樣相―柏崎宿問屋と三餘堂の若者の場合―」。
- (41) 飯塚直吉は關矢孫左衛門。北魚沼郡竝柳の割元役（大庄屋）關矢家の養子となり、北海道の開拓に盡力、原生林保存に奔走した人物として知られている。
- (42) 「遠行」は死去の婉曲表現と思われるが、それに該當するのは目崎徳衛著『南城三餘集私抄』（小澤書店・一九九四年發行）「藍澤南城略年譜」の「安政六年、八月六日、蝶す」の記事である。だが、蝶は朴齋の子であるので「古先生」との記述と矛盾する。
- (43) 『三餘集』卷七「祭智賢師文」に、村松本覺寺の智賢が川に落ちて亡くなったことが述べられている。
- (44) 『越佐の書』（新潟日報事業社、一九七四年發行）による。
- (45) 『三餘集』卷五「瀧石の記」。
- (46) 女谷から南條までは地圖上の直線距離で18キロある。
- 〔附記〕 執筆にあたって福原國郎氏から資料の提供を受け、いくつかのご教示を頂きました。また、調査にあたって柏崎市立圖書館に大變お世話になりました。心より御禮申し上げます。